

## 与那国セミナー&研修ツアー レポート

JCBS 会員 小林史武

2024年10月11日～13日、「JIBSN 与那国セミナー&研修」に参加しました。  
私自身は2022年にJCBS会員のお仲間に入らせていただき、一昨年竹富町・波照間島、  
昨年標津町に続く3回目の参加でしたが、今回も与那国町・事務局・旅行会社の皆様の  
準備ときめ細かな対応でとても充実したセミナー&研修でした。

石垣空港で参加者の皆さんにお会いした時は、一年ぶりの同窓会に来たようで、  
50人乗りのプロペラ機で向かう与那国島への30分間は、眼下に、西表島など沖縄の先島が  
見え、あっという間のフライトでした。



琉球エアコミューター DHC-8 50人乗り



与那国空港（滑走路 2,000m）

日本最西端の国境の島、与那国島は、台湾から約111km、石垣島から約127km、  
沖縄本島から約500kmの距離にあり、東京からの直線距離は約2,000km。  
面積は約28平方キロメートル（小笠原の父島、硫黄島より若干大きい）、  
人口は1683人（2024年9月末）ですが、与那国空港の滑走路は2,000mあります。  
年間旅客数約10万人の離島空港に2,000m規模の滑走路があることは、有事対応時に  
より大型の機材が離発着することを想定してのことだと考えられます。（後述）

与那国空港到着後、参加者は数名ずつに分かれて宿泊先へ。翌日のセミナーでもお話があり  
ましたが、与那国島でも宿泊施設不足が観光での地域活性化の大きな課題のようです。  
年間4万人の観光客は、日帰り観光が増加しているとのことでした。  
以前は空港近くに「アイランドホテル与那国」（77室）がありましたが、2021年に休業。  
その後、コロナ禍があり、営業再開の予定はないそうです。

私が泊まったゲストハウスは、重鎮の皆様とご一緒でしたが（笑）、もちろんバス・トイレは共同利用、各部屋はコンテナハウスとドミトリータイプで、まさに島の宿。朝食は役場の方がお弁当を運んできてくださり、深夜までの泡盛会を含めて、海の家を満喫させていただきました。

<10月12日(土)>

「自衛隊見学」グループと「与那国馬・自然ふれあい」グループに分かれて研修が始まり、日本最西端の地に向かいました。

#### ◆「自衛隊 与那国駐屯地」

沿岸監視隊員(広報)の方は、日頃、住民との交流・理解促進を大切にされているとのこと、とても詳しくご説明していただき、参加者からの質問にも丁寧にお答えいただきました。

与那国駐屯地は、与那国島の西南部、久部良地域の南牧場近くにあります。

与那国沿岸監視隊は、陸上自衛隊の情報部隊である沿岸監視隊の一つで、島内に2基のレーダーがあり、24時間態勢で周辺の船舶や航空機を監視しています。

隊員は約200名(女性20名)、九州・沖縄出身は5%、与那国出身は1%2名。

家族帯同は10~20%とのこと、隊員の奥様は地域活動に参加されているそうです。

与那国駐在の手当は厚く、陸上自衛隊でのMAX水準とのこと。隊員の宿舎は、久部良・祖納・比川地区に分散して設置され、現在も増設されています。

基地建設に対する地元要望で作られた、体育館と日本陸連公認基準のグラウンドは、総工費29億円で建設されたそうです。(有事にはヘリポートとして使用)

「国民保護計画」として、島民を一日で島外に避難させる計画が策定されており、有事には航空便11便 B738 機材(定員 約160名)とフェリーで、避難先は沖縄県内の他、佐賀県を避難者受け入れ先として計画しているとのことでした。

与那国島は、日本の最西端としての重要拠点であり、対空防衛の前線基地として、現在も用地拡大が進められているとのことでしたが、1972年(S48 沖縄返還の翌年)には、自衛隊の配備計画要請書を与那国として発信していたと知りました。

一方で「神高い島 与那国に 軍隊はいらない」といった抗議行動もあり、現場としては、住民との交流、理解促進に努めているとくり返し仰っていました。



<与那国沿岸監視隊シンボルマーク「サンアイ・イソバ」>

「サンアイ・イソバ」は、15世紀末から16世紀に実在したとされる与那国島の女性酋長。統治者として島の政治と開拓に従事し、近代的な発展に貢献したと言われています。巨体と怪力の女傑として知られ、与那国島を統治し、琉球王国配下の宮古島の軍勢が与那国島に攻め寄せた際に撃退したと伝えられています。

<与那国沿岸監視隊のシンボル>

女性酋長：島の防衛の象徴

矢先：情報伝達

太陽と南十字星：国境

髪飾りテッポウユリ（与那国町花）：島民との信頼

#### ◆与那国馬・自然とのふれあい



<与那国馬>

「与那国馬とのふれあい」については、参加された方からいただいた写真と説明文を記載させていただきます。

『ヨナグニウマは日本に8種類いる在来馬の1種で、与那国町の天然記念物です。』

在来馬 ヨナグニウマの特徴は、

- ① 体高が小さい。110cm～120cm。英語名「YONAGUNI PONY」
- ② 毛の色が茶色のみ。模様がない。色の濃い薄いなどの違いはある。
- ③ ひづめが硬い。蹄鉄をつけていない。昔はわらじをはかせていた。』

#### ◆「日本最西端の地」



<日本最西端の地>

与那国島西端の西崎（いりざき）の位置は、北緯 24 度 26 分 58 秒 東経 122 度 56 分 01 秒 晴れた日、年に数回のように、はるか西方に台湾を見ることができるそうです。

最先端部分は標高 50m 以上で、周囲は断崖絶壁です。

日本最西端の碑の近くには展望台があり、島全体がパノラマ状に見渡せ、黒潮の流れを感じることができました。

#### ◆「JIBSN セミナー 2024 与那国」



10月12日13時より「JIBSN セミナー 2024 与那国」が与那国町観光協会会議室で、稚内市・礼文町・根室市・標津町・小笠原村・対馬市・五島市・竹富町と与那国町の自治体の皆さん、JIBSN・JCBS 会員等 約 50 名で開催されました。

セミナー詳細は、別途広報等でご覧いただければと思いますので、割愛させていただきますが、開催地の与那国町 糸数町長から冒頭のご挨拶で、

「ゲートウェイを強化したいが砦の機能を高めざるを得ない状況になってしまっている。

今は、台湾との交流を積極的にできないが、台湾人と民間レベルで交流しながら、毎日、行き来ができるようにしたい。日本中の皆さんにも与那国に来てもらいたい。」

『砦とゲートウェイ：境界地域の課題』セッションのなかでは、

「与那国に何もなかった頃、台湾との交流が多くあった。台湾 花蓮市と姉妹都市だが、国境離島の宿命を感じている。自衛隊は必要、だがそれだけでは困る。安心して生活できる施策が必要である。」とお話がありました。

稚内市 工藤市長からは、

「稚内から 4,000km。自衛隊は稚内に 301 沿岸監視隊がある。最近フレア照射があり、国境環境の厳しさを感じている。サハリンとは隣人同士として、市民レベルの交流を 50 数年続けてきたが、今はできない。

台湾に最も近い与那国島。南西地域の事情を理解する。」とお話がありました。

『境界地域におけるグローバルリスク』セッションでは、

地政学的リスク、気候変動リスク、感染症・医療体制リスク、人口動態変動リスクなどが各自治体から発表され、観光・島おこしについては、宿泊施設・観光防災体制の課題が報告されていました。

#### ◆「懇親会」



<棒踊り（東自治公民館 棒座）>



<舞踏（与那国町民族芸能保存会）>

セミナー後は、嶋仲公民館に場所を移して、与那国町の皆さんの温かいおもてなしで、懇親会を催していただきました。

披露された芸能舞台は、各地域の豊年祭で今も続けられている「棒踊り」「舞踏」で、

南方文化、中国文化の影響とともに、琉球王朝時代の文化も受け止めて、八重山諸島の中でも特異な文化を継承し、国の重要無形民族文化財に指定されています。



お酒はもちろん「泡盛」。「与那国」が振る舞われました。

アルコール度 60 度の「花酒」は与那国島だけで製造されている独特の蒸留酒(スピリッツ)で、原材料・製造法は泡盛と同じですが、アルコール度が 45 度を超える場合は税法上スピリッツとなるそうです。(崎元酒造所 説明)

<10月13日(日)> 青空の下、洋上からの与那国島周遊と島内研修へ

◆洋上クルーズ



<洋上クルーズ（高速半潜水船）>

チャータークルーズ船は、久部良漁港から黒潮の高波を受け、石灰石の隆起で形成された断崖絶壁の海岸線を航海しながら、洋上から与那国馬の南牧場・立神岩・海底地形遺跡など巡りました。

以前はチャーターした飛行機で与那国⇄花蓮の国境を越えたと同っていますが、洋上から西の彼方を望み、古代から黒潮の荒海を越えて交流した人々に想いを寄せるひと時でした。

◆「DiDi 与那国交流館」「Dr.コトー診療所」「共同売店」



<Dr.コトー志木那島診療所>



<共同売店>



<島そば>

クルーズ船から上陸し、「DiDi 与那国交流館」で島の歴史・文化を学んだ後は、「Dr.コトー志木那島診療所」「共同売店」「島そば昼食」3チームに別れて、散策を楽しみました。

テレビドラマ・映画「Dr.コトー」のロケ地は、20年経った今も観光客人気のスポットです。「共同売店」では島の作物ほか様々なものが売られていますが、自衛隊の方が言われていた通り、物価はちょっと高めなようです。(たまご 1パック 400円前後)

「島そば」の昼食は、ちょっとグロテスクな「てびちそば」(豚足)がプリアオーダーされていて、皆さんで美味しくいただきました。

◆ティンダバナ



昼食後は、最西端観光(株)の観光バスで移動。島内スポットを周って、与那国空港へ。

「アヤミハビル館」では、沖縄に生息する大型の蛾、県指定天然記念物「ヨナグニサン」を鑑賞。

「ティンダバナ」は屏風のようにそそり立つ、標高 100m の天然の展望台で、眼下には祖内集落、雄大な東シナ海が一望でき、女酋長 サンアイ・イソバにまつわる旧跡も多く残されています。

<最後に>

今回も与那国町の皆様の温かいおもてなしと参加者皆さんのチームワークで、有意義で、充実したセミナー&研修を過ごすことができました。

ある参加者の方からいただいたお話をご紹介します。

『このようなツアーがあることを知りませんでした。とても魅力的な内容なので、もっと宣伝もできないでしょうか。参加者が増えると思います。企画も増やせないでしょうか。』とご意見を伺いました。(私が航空会社の者だからでしょうか)

私自身も初めて参加した時から、知的好奇心が大いに高まり、人やコトとの出会いも多く、素晴らしい企画と感嘆しています。

一方で旅行商品としては、世の中に出まわるインターネットでポチッと予約できる商品と違い、企画段階から、飛行機・バス・宿・ガイド等の手配、仕入原価、販売価格、そしてすべてに関わる仕事量を考えると、おそらく旅行会社としては、とても難しいツアーかもしれせん。

与那国空港についた時、空港近くの駐車場に、大型観光バスが数台停まっていたのには驚きましたが、オーバーツーリズムを心配する観光地と違い、こうした特別ツアーで訪れる地域は、一つひとつの手配・調整が想像以上に困難なのだと思います。

自治体、地元事業者、JIBSN・JCBS 事務局、旅行会社 そして参加者などステークホルダー全ての皆様のご協力があって成立しているセミナー&研修ツアーだと認識しています。

個人的には、こうした意義深い取り組みを続けていけることを願っています。

国境、境界地域の問題の多くは、根深い背景があると思いますが、こうした交流を続け、様々なレベルで対話し続けることが大切で、意義のあることなのだろうと思います。

コロナ禍で中断した、国境を越えての人々の往来が復活していくよう、境界地域活動に、これからも同志の皆さんとご一緒に取り組んでいきたいとの思いを強くした与那国ツアーでした。

最後の最後に…

10月14日 石垣島で延泊した最終日の朝、テレビを観ていると…

「中国軍が台湾周辺で軍事演習」とNHKニュースが飛び込んできました！！

「えっ！！ほんと?!」「これが国境地域で暮らすということなのか」

ボーダーを実感した瞬間でした。

<自己紹介>

小林史武（こばやし ふみたけ）1963年12月29日生まれ

1987年4月 ANA 入社

国内外空港、営業本部、グループ旅行会社、乗員部門、松山支店長などを経て

2022年4月より 現職 ANA 総合研究所 価値共創部 主席研究員



<2022年11月 波照間島>